

論文の和文要旨

論文題目

20世紀初頭のトルキスタンにおける教育改革
—ジャディード知識人の試み—

氏名

Jasur Khikmatullaev ジャスル・ヒクマトラエフ

本論文の研究視角

20世紀初頭、つまり、ロシア帝国がロシア語・現地語学校を開校した1884年から、1917年のロシア革命までの時期を本論文の対象とする。この約30年の間にウズベキスタン教育史には大きな変容があった。この時代トルキスタンはロシアの植民地であり、社会・経済的、さらには文化的な変化が進行しつつあった。トルキスタンにはロシア統治以前から寺子屋式のマクタブと高等学院のマドラサが存在していたが、それらは次第に時代の要請に答えられなくなっていた。イスラームの伝統が根強い地域を支配することはロシア帝国にとって容易ではなかった。そこで、ロシアはムスリム社会と摩擦を起さずに支配する方法を選び、ロシア人とムスリムの生徒のためにロシア語・現地語学校を開校し始めた。しかし、ムスリムは生徒のロシア化を恐れ、ロシア語・現地語学校にはなかなか子弟を送らなかった。この状況を理解し、教育を改革しなければいけないと考えたのがジャディード知識人である。ジャディード知識人は新方式学校を開校することによって問題を解決しようとした。ジャディード知識人はトルキスタンの民衆を啓蒙し、トルキスタンの政治・社会・経済的な状況を改善しようとしたが、とりわけサマルカンドのジャディード知識人マフムードホジャ・ベフブーディーはトルキスタン自治の実現のためにもっとも積極的に活動し、その目的で新方式学校を開校したことが注目される。

本論文の目的は、トルキスタンにおける教育改革運動はいかなる要因でどのように展開したのかを検討することである。そこで、その背景として、20世紀初頭のロシア統治下のトルキスタンの政治的および社会・経済的な状況を調べる。その上で20世紀初頭のムスリム知識人の論説や著作などを分析することで、彼らの教育運動とその思想を明らかにする。あわせて、教育改革をトルキスタンのムスリムはどのように受け入れたかを明らかにしたい。

各章の内容

上述のような問題意識に拠って立つ本論文の具体的な考察対象は、1884年から1917年のロシア革命までの時期に活動したジャディード知識人の試みを主な対象とする。序章と終章を含む7章から構成されるが、各章の内容は、以下のとおりである。

第1章では、ロシアによる征服以前のトルキスタンの政治・社会・文化的な状況を概観し、ロシアが征服した後にトルキスタンでいかなる変化が起きたのかを検討した。

征服前のトルキスタンの住民の主な生業は農業、商業、牧畜、手工業であったが、治安は悪く、交易も自由にできなかった時代であった。ロシア帝国はトルキスタンの征服以来、さまざまな形で近代化を導入しはじめた。ロシアは郵便局、鉄道、工場、電灯、電信などの新しい要素をもたらした。また、ロシア帝国はトルキスタンを統治して以降、綿花の生産に力を入れ、それはムスリム社会の経済にも大きな影響を与えた。

第2章では、トルキスタンに古くから存在していた初等学校のマクタブ、高等学院の

マドラサ、さらにロシア政府によって開校されたロシア語・現地語学校、そして、ジャディード運動の創設者であるガスプリンスキーについて検討した。マクタブは 20 世紀初頭になると、時代の要請に対応できなくなった。マドラサも価値を失ってきた。

ロシア側の観察者もムスリム知識人もマクタブとマドラサを批判的に捉えていた。ジャディード知識人がマクタブを批判的にみていた理由は、トルキスタンの発展のためにはイスラーム教だけではなく、世俗的な教育も受けた若い青年が必要だと考えていたからである。クリミア・タタール人のガスプリンスキーは、ムスリムのために「新方式学校」を開校した。彼は新方式学校をクリミアだけではなく、トルキスタンでも開校しようとしたのである。この目的で彼は 2 度トルキスタンを訪問し、現地の知識人と新方式学校の開校について話し合った。

第 3 章では、トルキスタンにおけるジャディード運動の誕生、ムスリム知識人の試み、さらに、教育問題について検討した。また、ベフブーディーの活動にも触れ、彼が刊行していた雑誌『アーイナ』についても検討した。20 世紀初頭にトルキスタンの民衆の無学と無知を把握したムスリム知識人は、ガスプリンスキーの影響で教育改革運動と啓蒙運動に積極的に取り組んだ。ジャディード知識人は、新方式学校の開校、教科書の出版、慈善団体の設立、雑誌や新聞の刊行と並んで演劇運動にも着手した。ジャディード知識人の代表者であるベフブーディーにはトルキスタンのムスリムを統合し、自治を実現する夢があった。自治の実現のためにも教育が必要不可欠だったのは明らかであった。

第 4 章では、トルキスタンの代表的な知識人である、ベフブーディーとムナツヴァル・カリの教育論を検討した。2 人の知識人はどのような目的で教育を改革しようとしたのか、そしてどのような方法で活動したのかを明らかにした。ベフブーディーにトルキスタン自治を実現すると言う夢があったとすれば、ムナツヴァル・カリには民族の発展のために優秀なムスリム青年を教育するという夢があった。2 人の教育論をまめてみると、2 人とも初等教育をはじめ、高等教育に到るまでの教育課程を考えていたことがわかる。また、2 人とも青年を外国に留学させることも想定していたことがわかった。

第 5 章では、ジャディード戯曲や知識人の論説を手がかりに、20 世紀初頭のトルキスタンにおいて大きな社会問題とされていた「人生儀礼」と教育改革への影響について考察した。当時トルキスタンで活動していた代表的な知識人が「人生儀礼」についてどのように考えていたのかを検討した。盛大な人生儀礼に消費される資金が教育改革に用いられたならば、状況は大きく変わるとジャディード知識人は考えていたことが明らかになった。

終章では、トルキスタンのムスリムとロシア人の間で議論された民族名称問題について検討した。また、ベフブーディーの自治論について考察した。最後に、ジャディード知識人の教育改革運動の現代の教育への影響についても考察した。トルキスタンのムスリム定住民は「サルト」と呼ばれていた。トルキスタンのムスリム知識人は、この「サルト」という名称に反対し、その本当の意味について論説を書いて民衆に知らせようとしたが、その背景には民族的な自覚の成長が認められる。ベフブーディーは、1905 年のロシア第一次革命期からトルキスタン自治を実現するために努力した。1917 年 11 月 26 日にトルキスタン自治が宣言されたが、このトルキスタン自治は 1918 年 2 月 22 日ソビエト政権によって打倒された。

結論と今後の課題

ジャディード運動は、トルキスタンのムスリムは一つの民族として成立すること、教育改革によって知識や技術が普及すること、そして人々の世界観が変化することの基礎となったことが明らかになった。

ジャディード運動と 20 世紀末の独立したウズベキスタンの教育改革を比較すると、共通点が多いことがわかる。たとえば、ジャディード知識人のベフブーディー、ムナツヴァル・カリらは青年を先進諸国に送り、教育させることを望んでいた。ウズベキスタンのカリモフ大統領も独立前から青年の教育を改革することは第 1 の課題と主張し、「能力の高

い青年をソ連の代表的な機関、また、外国に送らなければならない」と指摘していた。また、20世紀初頭に新方式学校の開校とともに教授法の見直し、教科書の出版などが重要な課題となったが、独立してばかりのウズベキスタンの教育改革も同じ課題に直面した。ソ連から独立したばかりのウズベキスタンは青年を啓蒙し、共産主義に代わる新たな世界観や価値観を取り入れなければならなかった。ジャディード運動は現在のウズベキスタンの教育制度の基礎となったと言っても過言ではない。ウズベキスタンの独立後、カリモフ大統領は教育改革の面では、ジャディード知識人の方法を選んだのも明らかである。以上のことから、ジャディード運動はウズベキスタンの独立後の教育改革に大きく影響したと言える。

ジャディード運動はきわめて大きなテーマであり、残されている課題は非常に多い。本論文では、主にサマルカンドとタシュケントにおけるジャディード運動を考察したが、今後はブハラにおけるジャディード運動も検討したい。また、本論文ではアブドゥッラ・アウラーニー、フィットラトなどの知識人の教育論を検討することができなかった。今後、これらの代表的な知識人の教育論も考察したい。また、本論文では、20世紀初頭の互酬ネットワークについて十分に考察することができなかったため、今後は19世紀末-20世紀初頭における民衆の相互扶助について検討したい。